

倉橋先生を

お迎えして

中西ヒサノ

大阪府私立幼稚園連盟二十周年記念式典が催された際、これに出席された倉橋惣三先生は、式典が終ると京都におもむかれ、京都保育連盟の名のもとに行われた倉橋先生を囲んでの座談会に出席されました。

編集部

「えらいニュースがある」と柳沢先生から突然聞かされた私は、いろ／＼これに返答してみたが、どれも当らなかつた。それ程、倉橋先生の御西下は珍らしく、又予期せぬことであつた。

大阪の私立幼稚園協会の創立二十周年の祝賀式に臨まれる為、御西下になることがわかつたので、この機会に京都へ是非お立寄り願いたいものと思ひ、早速大阪の會長利田先生宅を訪れ、大阪での先生の御予定を承つた。

てお待ち申していた。まわり縁に置かれた椅子に、ドツカと腰かけられた先生は、松越しに西山を眺められて、

「あゝ京都はいゝ、実に静かだ。いつきてもいゝね」と、さも満足

そうであつた。どうも京都の人に魅力を感じておられないが、京都の地をこゝ慕つておられる先生である。又私たちも、この珍客をお迎えするについて何の術も持たないが、京の地がこれを補つてくれる幸を、つく／＼感じた。

「先生のお疲れになることは、この際一切止めてほしい」と最初にフレイベルの山川さんから注告をうけているので、一切慾なプランはやめることにした。

今の京都の先生たちは若い人が多いので殆んど先生を知らない、たゞ幼児教育の誌上を通じて識っているのである。日本幼稚園の生みの親であり、育ての親である先生を、この際是非皆さんに御紹介したいものと思ひ、公私立が一緒になつて京都保育連盟の名のもと

に先生をかこむ座談会をもつことにした。しかし当日四〇〇名と云う大勢の人が集つたので、やむなく講演の形式をとらざるを得なくなつた。

八年ぶりに聴く、なつかしいお声、沢山の子供たちにかこまれた様な幸福そうなお顔、少し言葉はきゝとりにくゝなられたが、ユーモアを入れた、その熱弁ぶりは昔と変りがない。先生を知っている相当年輩の人達は、若かりし日に会場で先生からうけた数々の御講義を思い起し感激を新にされたことである。

幼児教育の重要性を、我々担当者のみがこれを主張してきた。日本の学者は、これに味方してくれず実に冷淡な態度であつた。しかし先生一人が子供の世界に飛込み子供と共に生活し、子供から学びつゝ、私達の指導に當つてこられたのである。

今日幼稚園が学校教育の一環として、学校体系の中に加えられ、しっかりと位置づけを持つこと

のできたのは一に先生の蔭の御盡力によるところ多く、その偉大な業績を忘れてはならない、御引退後も誌上を通して御指導をうける幸福な私達である。

今後、各地方にお出ましいたいご機会も少くなるので、先生の一言一句聞きのがすまいとした。

○子供と共に生きる、よろこびを知る事。

○子供から学び、勉強し、保育者自身が日々成長することが大切である。

○子供の帰ったあとの語らい、反省こそ重要で、明日への幼児の成長の基盤である。

と、話の要旨はこんなことであつた。

終戦後、我国の教育のあり方も一変し民主主義教育に転換した。人格の完成をめざし、個人の尊重自主性、創造性等の涵養に重点をおかれるようになった。小中高はこれが為相当の混乱をみたが、幼

児教育のみ、何か底に安定感をもつて今日まで進んできてまいつたように思う。それは倉橋先生が、幼児教育の本質をしっかりと把握され、力強い信念のもとに私達を指導して下さつたからである。

先生は且て幼児の自発性、総合保育の重要性を叫ばれてきたことを覚えてゐる。

個人の尊重も、自主性も、自発

の尊重がその基盤をなすものであると思う。又今十二の楽しい経験を示されているが、これも以前に先生から、楽しい幼稚園はいかにあるべきか、又会場の指導、総合的な取扱ひの重要性を述べられてきたので今更新しいことには思えない。しかし近時幼児の行動観察が、やかましく叫ばれるようになった、個々の子供を把握することに於て教育ははじまる。認識を新にし、幼児の教育に当らねばならない。

終戦後、はげしい混迷がうづま

く、こうした社会に育つ子供たち、幼稚園は何をなすべきか、世界平和を目ざし、幼稚園を楽しい思い出の場とすると共に、社会に適応できる力と、これを改善してゆく力のある子供に育て、行かねばならぬと思う。

さて講演でお疲れの先生を京情緒豊かな南禅寺の瓢亭に御案内した、古びた田舎風の家である。奥

まつたところは静かな古風な離れ座敷がある。池にうつるボンボリの灯、二貫もあるという白、赤の鯉が、時々背をのぞかせて通つてゆく、尾で水をはじいては静けさをやぶる。

話の中に聞える、かすかな鐘の音、先生は瞳をつむられて耳をかたむけられる。

「あれはどここの鐘の音ですか」

「さあ、どつちから音がしましたえ」

と姐さんは全く感じが無い、全く

幸福な環境にいて鐘の音を味い得ぬ不幸な人である。

「やつぱり来てよかつた、いゝね」

とよるこんで下さる。やがてアンドンの道びきをうけてその家を去つた。こうしたこと、いささかでも旅情をお慰めすることができたといふれば幸なことである。

世間では、奥様が余り先生を大切になさりすぎるのでお弱りになるとの説もあるので、この点奥様に反省していただくことにして、近き日再び京の地を訪れ下さるよう、お約束してお別れしたのである。

終りに先生の御健康をお祈り申上げると共に、フレールベルさんの御厚意に対し、厚く御礼申上げます。

(京都市保育会長)